

## 開講にあたって

かつて帝政ロシアの体制は悪しき圧制とみなされ、その崩壊は自明であったと考えられてきました。ソ連の歴史学は自らの建国につながる革命運動を正当化し、他方で、欧米の歴史学は旧態依然たる専制体制の問題点をリベラルな立場から批判してきました。ロシア帝国に多様な民族が居住したことは知られていましたが、その諸民族は専制の下で抑圧されており、圧政への抵抗として諸民族のナショナリズムが発展したのだと捉えられてきました。しかし、近年興隆したロシア帝国論は、むしろ諸民族を束ねる巨大な帝国が数百年も維持された理由に目を向けるようになりました。つまり、帝国ロシアによる多民族社会の統治が比較的柔軟で合理的であったと考え、そのメカニズムを明らかにしようとしてきたのです。その中には、世界大戦が起これなければ帝国ロシアにはさらなる持続可能性があったとする議論もあります。では、ロシア帝国の崩壊は世界大戦の最中に生じた単なる偶然だったのでしょうか。それとも、それ以前に崩壊につながるような帝国社会の動揺が起こっていたのでしょうか。これが、本講演シリーズの出発点となる問いです。

本講演シリーズは、近年の帝国論の成果も踏まえつつ、多様な地域や民族に焦点を当てて帝国崩壊を考察します。近年の帝国論によって、帝国の統治システムの分析が進展し、多民族の境界地域が帝国統治に有機的に組み込まれていたことが明らかにされてきました。こうした成果を踏まえつつ、帝国の体制と諸民族の関係が進化したことが体制崩壊にどう影響したのかという問題を、革命を終点に置く議論とは別の次元で検証する必要があります。かつては多民族の境界地域を帝国に接合する傾向にあった各地のエリートは、いつ、どう変容し、体制から距離を置く側面も見せ始めたのでしょうか。帝国統治のための近代的な諸制度は、体制を強化したのでしょうか、その崩壊を促したのでしょうか。帝国の統治システムが境界地域へ広がり、諸民族との接点が拡大する中で、体制と諸民族の間、諸民族相互の間関係も深まっていきます。この関係の深化が、どう体制を「溶解」させていったのか。こうした論点から、西部境界地域、極東、ヴォルガ・ウラル、コーカサス、中央アジア、ユダヤ人、ウクライナなどの多様な境界地域の多様な集団に焦点を当てていきます。

2022年3月

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授

青島 陽子

## 開 講 日 程

日 程		講 義 題 目	講 師
第1回	5/9 (月) (ハイブリッド)	ロシア帝国の近代的諸改革と西部境界地域	北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター 准教授 青島 陽子
第2回	5/13 (金) (ハイブリッド)	ロシア極東のアジア系住民：朝鮮人を中心に (19世紀後半～20世紀前半)	早稲田大学大学院 政治経済学術院 准教授 シュラトフ ヤロスラブ
第3回	5/16 (月) (ハイブリッド)	イスラーム教徒と帝国の戦争	北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター 教授 長縄 宣博
第4回	5/20 (金) (ハイブリッド)	コーカサス・ムスリムのディアスポラと二つの帝国の解体	ビルケント大学 経済学・社会科学学部 博士課程 野坂 潤子
第5回	5/23 (月) (ハイブリッド)	まっろわぬ協力者：「巡礼」で読み解く中央アジア遊牧社会	北海道教育大学 教育学部釧路校 准教授 秋山 徹
第6回	5/27 (金) (ハイブリッド)	帝国が溶解すると何が起こるのか：ユダヤ人の場合	東京大学大学院 総合文化研究科 准教授 鶴見 太郎
第7回	5/30 (月) (オンライン)	ウクライナとロシア：南西諸県におけるナショナリズムの競合	ウィーン大学 歴史文化学部 博士課程 村田 優樹

※都合により日程等の一部を変更することがあります。



## 第1回 5月9日（月）

### 「ロシア帝国の近代的諸改革と西部境界地域」

青島 陽子（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・准教授）

日露戦争の最中に高まった革命運動によってロマノフ王朝の既存の体制は大きく揺さぶられ、帝国政府は近代的諸改革に踏み切ることになりました。1904年12月の勅令では「国家秩序の改善計画」が示され、地方自治機関の権限の拡大、司法制度の整備、検閲の緩和と並んで、非正教徒や非キリスト教徒、非ロシア人の権利を制限するような法律の再検討が目指されることになりました。さらに、1905年10月マニフェストは、「人身の不可侵、良心・言論・集会・結社の自由」の住民への付与を宣言しました。さらに、国家ドゥーマ（国会）の開設方針が出され、帝国の多様な住民を立法プロセスに参画させることになりました。

現在、こうした諸改革が帝国の凝集性にどう影響したのかについて、歴史家の間で必ずしも合意があるわけではありません。しかし帝国権力が、領内の住民に対して個々人の活動の自由の範囲を拡大し、公的な生活に関与する間口を広げたことは間違いないと言えるでしょう。各言語集団や宗教・宗派集団は、自らの文化的諸活動を活性化させ、独自の権利を公共空間で主張する機会を増やしていきました。このように、多様な住民が公共的な空間に入り込むことで、一方では多元的な帝国の凝集性を高める可能性もあったでしょう。しかし、帝国権力が第一国会、第二国会を短期間で解散したことから分かるように、多様な主張の間の調整は簡単ではありませんでした。第三国会以降、境界地域からの諸民族代表を減らすことで国会運営の安定化を図りましたが、なお一定の議席を諸民族代表にも与え続けました。帝国権力は限定された形ではあれ諸民族との対話の回路を残したのであり、そのことは、諸民族に対して公共性への希求を喚起し続けることにもなりました。

続けて、西部境界地域を事例としつつ、信教の自由や母語教育をある程度許可したことが、境界地域の社会にどう影響したのか、お話ししたいと思います。政府が正教から他のキリスト教への改宗を認め、母語教育をある程度許可したことで、各言語・宗教集団は独自の文化コミュニティへの意識を強化することになりました。ただし、諸集団の境界線を引くことは容易ではなく、こうした傾向が行政・政治的な権利を要求する明確な集団を直ちに生み出したとは言えません。他方で、国家が非正教徒や非ロシア語集団に一定の譲歩をしたことで、境界地域ではその地域を守ろうとしてロシア・ナショナリズムが強化されることにもなりました。こうしたことが、必ずしも直接的に帝国の瓦解を招いたわけではありません。しかし、公共空間に現れた、こうした様々な文化的・政治的な要求は、戦時期には戦況を有利にするために外国勢力によって利用されることになったとも言われます。このように考えると、帝国末期の諸改革こそが、諸民族の遠心的分離を準備していたとも考えられるでしょう。

## 第2回 5月13日(金)

「ロシア極東のアジア系住民：朝鮮人を中心に（19世紀後半～20世紀前半）」

シュラトフ ヤロスラフ（早稲田大学大学院政治経済学術院・准教授）

ロシア帝国時代、極東地域に在住したアジア系住民は、大きく2つのカテゴリーに分類できます。一つ目は、従来からこの地域に住んでいた原住民（現在、「北方先住少数民族」として知られる、多くはツングース諸族に属しているナナイ人やウデヘ（ウデゲ）人、ニヴヒ人、オロチ人など）です。二つ目は、専ら19世紀後半からこの地域に移住した中国人（漢人や満人を含む）、日本人、朝鮮人です。今回の講義では、後者のグループに重点をおき、ロシア極東の日本人移民と中国人移民を概説しつつ、特に朝鮮人移民に注目します。

ロシア帝国と李氏朝鮮の外交関係を樹立させた露朝修好通商条約が締結されたのは1884年でしたが、ロシア帝国への朝鮮人の移住は既に1860年代から始まっており、ロシア在留の朝鮮人は日本人を大きく上回っていました。また、ロシア極東地域における朝鮮人移民は中国人移民とも明確な相違点があり、彼らに対するロシア当局（プリアムール総督府など）の姿勢も異なっていました。

他方、19世紀末から20世紀初期にかけて朝鮮半島は日清・日露関係の競争の場となっており、日清・日露両戦争を経て、1910年に日本帝国に併合されました。こうした地政学的な嵐はロシア在住の朝鮮人にも影響をもたらし、抗日運動やなどの政治活動への参加を高めることになりました。1910年代にこのプロセスが加速し、ロシア軍に徴兵された朝鮮人が第一次世界大戦に参加したり、ロシア革命並びに内戦にも積極的に関わったりするようになりました。そして、事態が落ち着いたかのように見えたソ連初期でしたが、1937年に極東在住の朝鮮人たちがスターリン政権により中央アジアに強制移住させられました。

どのような朝鮮人がなぜロシア極東へ移住したのか、彼らに対するロシア政府・地方エリートの立場は如何なるものだったのでしょうか。激変する複雑な国際情勢の中、ロシア極東在留朝鮮人の知識人は如何なる議論を展開し、ロシア当局とどのような関係を持ったのでしょうか。極東の朝鮮人から見たロシア帝国、ロシア革命、ソヴィエト政権は如何なる存在だったのでしょうか。他のアジア系移民と比較しつつ、解説します。

### 第3回 5月16日（月）

#### 「イスラーム教徒と帝国の戦争」

長縄 宣博（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 教授）

イスラーム教徒と戦争というとジハードを思い浮かべるかもしれませんが。イスラーム教を奉じる世界を拡大するために異教徒に対して行う聖戦です。では、ロシアに住むイスラーム教徒は戦争ばかりしてきたのでしょうか。

2022 年はロシアのイスラーム受容 1100 年の記念行事が計画されているように、ロシアとイスラーム世界との接触の歴史は長く、ロシアの中にまとまったイスラーム教徒を抱え込むようになってからも、470 年ほど経ちます。ロシアは、ヴォルガ川とウラル山脈に挟まれた地域を 16 世紀半ばに征服して以降、350 年ほどかけてシベリア、クリミア半島、南北コーカサス、中央アジアを吸収しました。もちろん、数十年も続く激しい抵抗運動もありましたし、17 世紀に始まるロマノフ王朝が最も多く戦争したのもオスマン帝国です。しばしば同信者との戦争にも兵士として参加したロシア帝国のイスラーム教徒は、どのようにロシア国家の中に統合されてきたのでしょうか。

今回の講義では、ロシアと苦楽を共にしてきた最も古いイスラーム教徒として、ヴォルガ・ウラル地域のタタール人に注目します。ロシア帝国では 1874 年に国民皆兵制が導入され、タタール人もまた国民の一員として、その後の露土戦争、日露戦争、第一次世界大戦に動員されます。講義ではまず、帝国政府が国内のイスラーム教の権威を頼りながら、兵士と銃後を動員していた仕組みについて解説します。次に、戦争に参加した兵士たちの言葉やタタール語の言論を読み解きながら、ロシア内地のイスラーム社会が、戦争の理不尽さ、ヨーロッパの帝国が牛耳る国際秩序への疑念、国家への忠誠の揺らぎを経験していたことを示します。最後に、帝政末期に醸成されたこのような不正義に対する感情や認識が、1917 年以降のロシアの革命と内戦をどのように形作っていたのかについて展望を述べます。

## 第4回 5月20日（金）

### 「コーカサス・ムスリムのディアスポラと二つの帝国の解体」

野坂 潤子（ビルケント大学経済学・社会科学学部 博士課程）

#### ロシア帝国によるコーカサス併合とムスリム・ディアスポラの発生

この講座では、ロシア帝国が黒海北岸とコーカサス全域を併合する過程で、多くのムスリムが移民として故郷を離れ、オスマン帝国各地に移住することになった歴史的経緯と、その結果として発生したディアスポラ（移民コミュニティ）が、ロシア帝国とオスマン帝国という二つの帝国の解体において、どのような役割を果たしたかについて考察します。

1856年のクリミア戦争の終結後、クリミア・タタール人を皮切りに、北コーカサス及び黒海北岸から対岸のオスマン帝国へのムスリムの移住が始まりましたが、特に、重要なのは、1864年のロシア帝国によるコーカサス併合の完了後に、クバン川右岸の黒海沿岸地域に住むアディゲ人（英語ではサーカシア人またトルコ語ではチェルケス人）が数十万人もの規模で移住した事件です。その後も、1876-1877年の露土戦争後に、やはりコーカサス地域の多数のムスリムが難民化し、移住を余儀なくされました。19世紀の後半に起こったこの一連のコーカサス・ムスリムの移民・難民問題は、当時のヨーロッパの各国において、勃興したばかりのジャーナリズムで盛んに取り上げられ、非常にポピュラーなトピックになりました。さらに、こうしたムスリム難民への支援は、しばしば、英国やポーランドにおいて、ロシア帝国の支配に反対・抵抗する勢力を中心に行われました。この問題は、当時の国際関係における重要な懸案の一つだったので

#### 統合されるムスリムとディアスポラのムスリム

ロシア帝国に併合されたコーカサス地域では、安定した統治制度の確立が模索され、ムスリム住民が多くを占める地域では、既存のカーディー（イスラーム法に基づく裁判官）を官僚として登用するなど、ムスリム・コミュニティの事情に沿った政策も行われました。また、一部のムスリムが帝国の首都で教育を受け、高位の軍人や文官として勤務する例も少数ながらありました。こうした統合を目指した政策は、一定程度の効果を持っていたと考えられます。しかし、帝国の外のディアスポラの存在とその帰還運動は、ロシア帝国にとって政治的な不安定要因であり続けました。

他方、コーカサスからの大量のムスリム移民は、受け入れ先のオスマン帝国において、従来の住民構成を大きく変え、オスマン帝国の解体に至る要因の一つになっていったのです。彼らは、移住先の地において、現地住民に同化しようとはせず、元々の文化・習慣を保持して、独自のコミュニティを形成しましたが、その存在は、トルコ共和国成立後の国民統合にとっても、一時脅威となりました。

#### 二つの帝国と越境するムスリム

黒海を挟んで北と南に分かれたコーカサス・ムスリムは、必ずしも常に相互の紐帯を保持していたわけではありませんでしたが、ロシア帝政末期の革命運動やその後の内戦期においては、その繋がりを活用しようとしていました。例えば、対ロシア抵抗戦争のシンボルであったイマーム・シャミールの孫でイスタンブール生まれのサイド・シャミールは、北コーカサスの反革命勢力にリーダーとして招かれてボリシェビキと戦いました。ディアスポラの存在が、帝国解体の遠心力として働いた例と言えるでしょう。

## 第5回 5月23日（月）

### 「まつろわぬ協力者：「巡礼」で読み解く中央アジア遊牧社会」

秋山 徹（北海道教育大学教育学部釧路校・准教授）

ロシアが多数の非ロシア人を包含する多民族国家であることは周知の通りです。異民族が暮らす広大な空間を征服・統治する上で、在地の非ロシア人エリートの協力が必要不可欠でした。近年、彼らの多面的な活動の実態が明らかになってきました。とくにロシアに対する彼らの「協力」とは、前者の「道具」となることばかりを意味せず、むしろ「ロシアを利用する」といった側面もありました。それゆえ、帝国の崩壊を考える際にも、在地エリートの動向が重要な鍵を握っていると考えられるのです。

本講義は、中央アジア遊牧社会——カザフ、クルグズ（キルギス）——に着目し、ロシア統治下におけるリーダーたちの変容を検討します。このことを考える際に着目したいのが「巡礼」です。巡礼というと宗教的なものが想起されますが、本講義では「人の移動」といった広い意味合いを念頭に置いて使用します。遊牧社会はその名が示す通り、定期的な移動を含む生活様式であり、ロシア支配のもとで遊牧民が行政境界によって従来の移動を制限されるようになったことは確かです。しかし、だからといってロシア支配のもとで遊牧社会のモビリティが著しく制限されていたと考えるのは一面的です。実際のところ、エリートを中心に広範な移動が行なわれていました。こうした「巡礼」は大きく四つに分類することができます：軍事巡礼、行政巡礼、教育巡礼、宗教巡礼。ロシアは軍事侵攻に当たって、遊牧民の機動力を活用するとともに、現地エリートの中には通訳や書記として植民地行政府に勤務する者も少なからずおりました。ロシアは支配の拠点となる都市にギムナジアに代表される教育機関を設置しましたが、現地エリートの中には子弟をそこで学ばせる者もおりました。最後に、19世紀末から20世紀初頭にかけて中央アジアのカザフやクルグズの間でも、帝国支配のもとで敷設された鉄道や蒸気船といった近代的インフラを活用して、メッカ巡礼（ハッジ）が流行しました。

このように、これら四つの「巡礼」はいずれも、ロシアをはじめとする帝国権力の浸透と密接に関連した現象でした。それではこうした巡礼は現地エリートにどのような影響を及ぼしたのでしょうか。出身地を離れ、様々な地域での経験、教育および人的交流を通じて、俯瞰的な視野を備えた近代的知識人を輩出しました。彼らは、既存の部族アイデンティティを超えたより大きなまとまり、すなわち民族共同体を想像し、ナショナリズムの担い手となり、20世紀初頭になるとカザフ人を筆頭に自治運動を展開してゆきました。しかし、「ロシア人のためのロシア」、つまりロシア民族主義的気運が強まる20世紀初頭のロシア帝国は、彼らの声に柔軟に耳を傾けるだけの包容力を喪失しつつありました。同時期に政府が推進したロシア人農業移民政策をめぐって、ロシア権力と現地エリート間の相互不信はより先鋭化してゆくこととなりました。

## 第6回 5月27日（金）

### 「帝国が溶解すると何が起こるのか：ユダヤ人の場合」

鶴見 太郎（東京大学大学院総合文化研究科・准教授）

ユダヤ人の歴史において、ロシア帝国は暗黒時代として記憶されて久しい。連想ゲームではおそらく「ポグロム」が筆頭に上がるだろう。ポグロムとは、主にユダヤ人やその商店に対して向けられた集団的な暴力を指すロシア語である。

ロシア帝国がユダヤ人にとって、長期的な観点から総体として見て決して明るい時代でなかったのは確かだとしても、その崩壊が短期的に見て明るいものだったかという点、それは必ずしもそうではなかった。なぜなら、まさにロシア帝国が崩壊した直後に訪れた内戦期に、それまでと桁違いの規模のポグロムが吹き荒れたからである。

それは、そのあとに訪れたソ連がもっと悪かったということではない。ソ連においてポグロムはほとんど見られなかった。ホロコーストを完全に食い止められたわけではなく、特にナチスが侵入した地域では凄惨きわまりなかったとはいえ、政府としてはユダヤ人を中心とした「反ファシスト委員会」を結成し、反ユダヤ主義とも闘っていた。

問題は、ロシア帝国が崩れたことにより生じた権力の空白である。それは、それまでにロシア帝国で起こってきた様々な動きが、ある意味で自由に荒れ狂うことを許し、ユダヤ人はその波に呑まれてしまったのである。

具体的にはこうである。当時、最終的にはソ連として結実する社会主義運動がロシアで活性化していた。ポリシェヴィキはその一翼を担っていた。同時に、立憲民主政を求める自由主義運動も盛んだった。これらのいずれにもユダヤ人はかかわっていた。さらに、特に20世紀に入るところから顕在化していたナショナリスト運動は、各民族の独立やさらなる発展を目指し勢力を拡大していた。ユダヤ人自身、現在のイスラエルへとつながるシオニスト運動やユダヤ人社会主義運動であるブンドといったナショナリスト系の運動を擁していたが、ウクライナ・ナショナリズムも目立つようになり、この権力の空白の時期に短期的に国家を樹立したこともあった。

これら運動はロシア帝国という傘の下で、一部協力しつつ競い合っていた。だが、傘がなくなったとき、新しい傘を誰が持つかということをめぐる競争が生まれてしまったのである。その際に、例えばウクライナ・ナショナリストは、ウクライナでの傘を主導するだけでなく、ウクライナのユダヤ人にもその下に入ることを要求し、ポリシェヴィキの傘に入ろうとするユダヤ人を裏切り者とする傾向が生まれた。これまで通りロシア帝国という枠組みの傘を維持しようとしたロシア・ナショナリストも同様の態度をユダヤ人に向けた。帝国に分散したユダヤ人が統一した動きを取れるはずもなく、いわば主要な傘の持ち手すべてから敵視される事態になってしまったのである。

第6回はこうした話を基軸に、ユダヤ人にとってのロシア帝国について解説したい。



## 第7回 5月30日（月）

### 「ウクライナとロシア：南西諸県におけるナショナリズムの競合」

村田 優樹（ウィーン大学歴史文化学部・博士課程）

キエフを中心とするドニプロ川流域は、かつてロシア帝国に属し、その地理的位置から南西諸県と呼ばれていました。本講義では、この地域で帝政末期に活発化した二つの民族運動、ウクライナ・ナショナリズムとロシア・ナショナリズムの展開について解説します。

本講義は三部構成です。

第一部では、ここ数十年の欧米や日本における研究動向に触れながら、この地域の民族問題を考える見取り図を提示します。このテーマは、自治や独立を求めるウクライナ人と、強権的支配で「ロシア化」を進める帝国権力との対立関係として、長らく研究されてきました。しかし、近年では、帝政末期のキエフにはウクライナをロシアの一部と考えるロシア・ナショナリスト組織が存在したこと、実は現地の民衆ははっきりとした民族意識を持っていなかったこと、帝国政府の政策は一面的な「ロシア化」よりももっと複雑であったこと、などが指摘されています。こうした議論を踏まえ、本講義では、この地域の民族問題を、民衆の忠誠心と首都のエリートの好意的政策を勝ち取るための、ウクライナ・ナショナリストとロシア・ナショナリストの競合関係として捉えていきます。

第二部では、同時代の出版物を引用しながら、ウクライナ・ナショナリストとロシア・ナショナリストの組織的運動とその主張を跡付けます。前者は、ウクライナ人が太古から存在する「民族」であり、固有の歴史・文化・言語・習俗をもつと考え、ロシア帝国のなかでウクライナ人が多数を占める地域に自治が導入されるべきだと主張しました。他方、後者は、ウクライナ人やウクライナ語というものは存在せず、あくまでも単一のロシアの枝葉にすぎないと述べ、自立を求めるウクライナ・ナショナリストを分離主義者だと攻撃しました。

第三部では、ウクライナとロシアのナショナリストの競合関係が帝政末期の社会で具体的にどのように現れていたのかを、1914年2月に起こった一つの事件を題材に見ていきます。この事件とは、ウクライナの国民詩人とされるタラス・シェフチェンコの生誕百周年記念祭を帝国当局が禁止したことをきっかけにキエフで起きた街頭デモと、それに対するカウンターデモです。かつてウクライナ人民族意識の発現とされてきたこの事件が、実はキエフにおけるウクライナ・ナショナリストとロシア・ナショナリスト双方の「弱さ」、また民族問題についての帝国当局のプラグマティックな立場を示すものであったことを、当時の新聞記事や警察の事件記録から分析していきます。

民衆の基盤の弱さと民族対立の本質化を避ける帝政の政策により、ウクライナ・ナショナリズムもロシア・ナショナリズムも、帝国の崩壊をもたらす根本的な原因になることはありませんでした。しかし、帝国が崩壊の危機に直面すると、民族集団は帝政に代わる権力の主体として現れることとなります。本講義では、最後に、第一次世界大戦以後の帝国の実際の崩壊過程とナショナリズムの関連について言及したいと思います。

## 公開講座開講状況

回	年	講義内容
1	昭和 61 (1986)	ロシア(ソ連)・東欧社会と日本
2	62 (1987)	変貌するソ連・東欧社会
3	63 (1988)	ゴルバチョフのペレストロイカ
4	平成 元 (1989)	岐路に立つペレストロイカ
5	2 (1990)	燃える東欧: 変革の軌跡とその将来
6	3 (1991)	ソ連・東欧圏の崩壊: 噴き出した民族・地域主義と改革の行方
7	4 (1992)	ソ連邦の解体とユーラシア新秩序の模索
8	5 (1993)	新生ロシアの一周年 - ロシアはどこへ
9	6 (1994)	ロシア極東への視座 - 隣人を知ろう -
10	7 (1995)	地域からの東欧史 - 国家と民族を越えるもの -
11	8 (1996)	中央アジアの世界 ~シルクロードから現代へ~
12	9 (1997)	ロシア文化の新しい世界
13	10 (1998)	動き出す日露関係
14	11 (1999)	北方ユーラシアの開発と環境
15	12 (2000)	新千年紀を迎えたユーラシア、体制転換10年
16	13 (2001)	声なき者の復権: スラブ・ユーラシア圏における民族と歴史
17	14 (2002)	米国同時多発テロ後のユーラシア: 国際関係とイスラーム
18	15 (2003)	サンクト・ペテルブルグ300年の歴史と文化
19	16 (2004)	ロシアを見た日本人・日本を見たロシア人
20	17 (2005)	ユーラシアの国境問題を考える
21	18 (2006)	多様性と可能性のコーカサス: 民族紛争を超えて
22	19 (2007)	拡大する東欧
23	20 (2008)	現代ロシアをめぐる7つの問い
24	21 (2009)	世紀を超えて: 東欧革命後の20年を振り返る
25	22 (2010)	地域大国比較の試みーロシアを中国やインドと比べたら何が分かるか?
26	23 (2011)	スラブ・ユーラシアで躍動する人々
27	24 (2012)	ユーラシアの自然と環境は誰が守るのか
28	25 (2013)	ユーラシアの現代と宗教
29	26 (2014)	記憶の中のユーラシア
30	27 (2015)	動乱のユーラシア: 燃え上がる紛争・揺れ動く政治経済
31	28 (2016)	スラブ・ユーラシア社会におけるジェンダーの諸相
32	29 (2017)	境界地域から北東アジア国際関係を考える
33	30 (2018)	ロシアと北極のフロンティア: 開発の可能性と課題
34	31 (2019)	再読・再発見: スラブ・ユーラシア地域の古典文学と現代
35	3 (2021)	メロドラマするロシア: アジアとの比較から考える大衆文化の想像力

【前回開講内容】

第1回 10月4日(月)

安達 大輔 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 准教授)  
「19世紀ロシアのメロドラマ」

第2回 10月8日(金)

田村 容子 (北海道大学大学院文学研究院 准教授)  
「「救国の妓女」幻想：中国におけるメロドラマの系譜」

第3回 10月11日(月)

斎藤 慶子 (上智大学外国語学部/日本学術振興会 特別研究員)  
「バレエ『白鳥の湖』 悲劇からメロドラマへ」

第4回 10月15日(金)

本田 晃子 (岡山大学大学院社会文化科学研究科 准教授)  
「ソ連製メロドラマ映画と住宅」

第5回 10月18日(月)

小松 久恵 (追手門学院大学国際教養学部 准教授)  
「いつか王子様が? : ドラマ「Made in Heaven」に見る現代インド結婚事情」

第6回 10月22日(金)

小川 佐和子 (海道大学大学院文学研究院 准教授)  
「越境するメロドラマ的想像力：帝政期ロシアのメロドラマ映画と新派映画の比較を通じて」